

領主の宗教は領民の宗教？——血塗られた橋から明るい未来へ：
より良い明日に向けての若者の結束
(原文は英語)

アイシャ・ムヒッチ (20 歳)
ボスニア・ヘルツェゴビナ
サラエボ国際大学

殺すか殺されるか。正しい選択も間違った選択もない。あるのは単なる選択肢だ——いつもそう言われてきました。私たちの国はいつもナイフで傷つけられる側で、「近隣諸国のナイフ」と戦ったことはありません。1683 年から 1995 年の歴史の中で延々と続いた、10 回の恐ろしい大虐殺の中で、バルカン半島のムスリムたちは壊滅しました。迫害者たちは、「キリスト教会の外には、真実、正義、善良、神との真の関係はない」というキリスト教会の教えに基づいて行動します。しかし、一体このような言葉が非キリスト教徒に対する大虐殺を正当化できるのでしょうか。

神は、自分のものでないものを奪う権利を誰にも与えてはいません。命は大切にされるべきものです。それが他の人間を苦しめるなら、なぜ良いこととして賞賛されるのでしょうか。宗教などという神聖なものの名の下に、なぜこんなにも凶悪なことができるのでしょうか。宗教は人々を虐げるためののでしょうか。

私は全ての大虐殺についての情報を探している内に、直近の大虐殺の前には、しばらく虐殺が起こっていなかったということに気づきました。そして、ある考えがふと浮かびました。まるで大虐殺に有効期限があるかのように、100 年が経過し、私たちがその大虐殺のことを忘れ、許し続けてしまう限り、同じことが繰り返されてしまうのです。

人生は川に似ています。そこには始まりがあり、障害物だらけの大荒れの時期があり、全てが死に、記憶だけが残る終わりがあります。大河には必ず橋が架かっています。私たちと共に多くの不幸な出来事を経験したのが、16 世紀に建設されたメフメド・パシャ・ソコロヴィッチ橋でした。とても美しい橋ですが、自国の民の血で汚れてしまいました。硬い石の上で多くの人々が苦痛や苦悩を味わい、なぜ崩れなかったのかと疑問がわくほどです。

平和とは人間の骨のように脆いものです。一度壊れてしまうとうまく直らず、「雨が降る」たびにシクシク痛みます。

生まれた時からの悪人はいません。しかし人生は、善人にハッピーエンドが保証されているおとぎ話ではありません。善と悪は至るところに存在しています。どちら側が優勢になるかは、それを選ぶ人々や環境次第です。

他の民族に対する憎悪が悲惨な状況の主な要因です。そのような環境では美味しいリンゴもうまく育ちません。宗教や民族性に基づく不平等を信じる人々に囲まれているという理由だけで、子どもたちがどんな影響を受けるか、想像するだけでも恐ろしいです。

古い世代を変えることはできませんが、若者たちが古い世代からの差別の影響を受けないようにすることが大切です。

自らの心の声に耳を傾け、大人の世界が求める理不尽な要求に従うことをやめさえすれば、進歩が現れ始めるでしょう。ゆっくりとした前進かも知れませんが、進歩には間違いありません。社会的活動を通して、既に達成されたこともあります。子どもたちが親世代の影響を受けることなく、肌の色や民族で人々を判断しないようになれば、全てが自然に解決できると私は信じています。

歴史は暗く恐ろしいものですが、私たちはその歴史の中に生きることはできません。前を向き、常に闘い続けなければなりません。

未来は、過去ではなく、新しい世代の土台の上に築かれつつあります。一人一人の子どもたちが結束し、平和な未来づくりに取り組めば、まだ世界を救うことができます。最も純粋で創造的なのは、自己中心的な要求や個人的な利益ではなく、皆にとっての生活の条件を高めることを目指している子どもたちです。善と悪との闘争が絶えず続いています。善は必ず勝利するはず。苦勞して学びを得なければならないこともあります。自分自身が肌で感じたことがなければ、他者の痛みを感じることはできません。何に対しても、忘れられた思い出という地へ入ることを許してはなりません。しかし同時に、自らの人生全体を過去の土台の上に置く必要はありません。あなたにできる最も価値のあるものは、忘れることでも、許すことでもなく、痛みと共に成長することです。

かつて、世界は地位、人種、民族によって完全に分断されていました。そして王位に就く者たちがあらゆる決定を行っていました。私たちはそこから大きく進歩し、若者たちが大きな影響を与えられる段階にまで到達しました。

私たちは立ち上がって結束し、圧制者に対して「ノー」を突き付けなければなりません。なぜなら、圧制者たちが血塗られた過去の象徴である一方で、私たち若者は明るい未来の代表だからです。